



Title	解離傾向とイメージ現実感との関連性の検討
Author(s)	本間, 美紀
Citation	若手イメージ研究者のためのブラッシュアップセミナー (Brush up seminar for young researchers on mental imagery) . 2013年3月16日 (土) ~ 17日 (日) . 北海道大学学術交流会館, 札幌市 . , 24-29
Issue Date	2013-03-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52526
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	proceedings
File Information	honma.pdf



[Instructions for use](#)

解離傾向とイメージ現実感との関連性の検討

本間 美紀

(北海道大学大学院 文学研究科)

キーワード：解離，イメージ体験，現実感

目 的

本研究では、解離性障害の疾患形成に寄与する認知的基盤の一つとして、現実感の高いイメージを形成する能力に着目し、解離傾向とイメージ能力との関連を調べる。

解離とは、「意識、記憶、同一性、または周囲の知覚についての、通常は統合されている機能の破綻」(American Psychiatric Association, 2000 高橋ら訳 2003)と定義され、解離を中核とする精神疾患は解離性障害と呼ばれる。解離は、日常的なものから病理性の高いものまでの連続体であると考えられる立場も多く、日常的な解離の例としては、白昼夢や空想がしばしば取りあげられる。これらは、「健康な解離」と表現される一方で、解離性障害の患者においても頻繁に体験される。彼らの空想は、あたかも現実のものであるかのように感じられることが特徴であり、体外離脱体験や交代人格など他の解離性障害に特有な症状の基盤となっている可能性が示唆されている(柴山, 2007)。そこで、本研究では、現実のような空想を形成する基盤にはイメージ能力が関与しているのではないかという仮説のもと、解離傾向とイメージ能力との関連性について調べることを目的とする。解離傾向と関連する認知機能が明らかになれば、発症メカニズムの一端が解明されるのではないかと考えられる。

柴山(2007)は、解離性障害患者においては、「過去の記憶や想像などが自生的に、まるで見えるかのように目の前数十センチのところや頭の中に浮かんだり、それが次々と展開したりする」(p.77)と述べている。また、そうした体験には、音などの他の感覚モダリティの要素も伴うことが

あり、それらの要素もまた、ありありと知覚のように感じられるという。浮かんだ像を現実と混同することも多いことから、こうした体験の一部は、臨床場面では一般的に“幻覚”と呼ばれる。しかし、柴山(2007)は、解離性障害の場合は、通常の幻覚体験とは異なり、多くの場合で実在性の確信にまでは至らない場合が多いと述べ、これを臨床一般でいう幻覚体験と区別するために「表象幻視」と呼んだ。

柴山(2007)の報告からは、解離性障害患者のイメージには、非常に豊かな感覚的詳細が含まれており、現実との混同が生じるほど高い現実感を伴って体験されるといえる。しかし、直接、解離傾向とイメージ能力を測る質問紙との関係を調べた研究においては、両者の間に相関関係は見出されていない(e.g., Heaps & Nash, 1999)。こうした臨床報告と実証的研究との矛盾には、以下の可能性が考えられる。まず、これらの研究では、研究対象者は非臨床群であったため、解離の程度が低いからではないかという批判が考えられる。しかし、非臨床群の中にも重篤な解離症状の存在が示唆される一定の基準を超える人が一定数いることが示されており、そうした人たちに体験内容を聴取した研究からは、全員ではないにせよ、彼らが実際に解離症状を有していることが示唆されている(田辺・小川, 1992)。したがって、非臨床群であったから相関が得られなかったということは、説明として不十分なように思われる。

もう一つの可能性として、それらの先行研究においては、イメージ体験の一部の要素のみしか測定されていないことが挙げられる。これらの研究で用いられている質問紙は、イメージの“鮮明さ”

のみ、あるいは、“視覚モダリティのみ”に焦点を絞って、イメージ能力の測定を試みたものである。しかし、イメージ体験とは、実験室で課題遂行のために形成する場合を除けば、様々な感覚モダリティを含み、かつ情動喚起を伴うような統合的な体験である。宮崎・菱谷（2001,2003）は、そのようにイメージ体験を統合的なものとして捉え、その構造について検討を行っている。彼らは、イメージが現実の知覚体験と比較して、いかに現実的に感じられるかというイメージ現実感の概念が重要であるとし、イメージ現実感は、鮮明さや統御性などの類知覚的側面、身体反応などの情動的側面、イメージ場面の熟知性や空想頻度などの過去経験から構成されることを示している。先述したように、解離性障害患者においても、イメージがあたかも現実のように体験され、時には現実との混同が生じることから、彼らのイメージ体験を考慮する際には、イメージの現実感という概念は重要であるといえる。したがって、イメージを統合的な体験として捉え、その現実感と解離傾向との関連を調べた場合、両者の間にこれまで明らかにされなかった関連性が見られるのではないかと考えられる。

それでは、イメージの現実感を構成する諸要素のうち、解離と特に関係が深い要因は何であろうか。宮崎・菱谷（2001,2003）のモデルからも読み取れるように、強い情動喚起が生じた際にイメージの現実感が高まることは、臨床場面では頻繁にみられる現象である。解離性障害患者においても、恐怖や不安などのネガティブな色彩を帯びたイメージが体験されることが多く（柴山, 2007）、そうした情動がイメージの現実感を高めている可能性は十分に考えられる。そのような強い情動は、高い現実感に寄与する一方で、イメージの類知覚的要素を減衰させる可能性を示唆する研究もあるが（田中・佐々木, 1994）、解離性障害患者においては、情動とともに、イメージ内容の具体的な形態といった知覚的要素も詳細に報告されることが多

い（柴山, 2007）。すなわち、情動的側面と類知覚的側面の両者が、解離性障害のイメージ現実感を考慮する上で重要な要因であると考えられる。

宮崎・菱谷（2001,2003）の研究では、多くの類知覚的情報を含み、かつ、強い情動喚起が生じると考えられる、個人的な体験に関連のあるイメージ（「これまでに経験したり、空想したなかで最もポジティブ、あるいは最もネガティブな情動喚起場面のイメージ」）を題材とした。しかし、解離傾向は外傷体験の保有率と関連していることが示されているため（cf. Putnam, 1989 安・中井訳 2001）、解離傾向が高い人が選択したイメージ場面の情動は非常にネガティブなもの（あるいはポジティブ度の低いもの）になる可能性がある。このように、題材の情動価が異なる場合、類知覚的側面からイメージ現実感への影響が抽出しにくくなると想定される。そこで、本研究では、まず、イメージ形成の題材を統一し、イメージの類知覚的側面から喚起される現実感（以下、類知覚的現実感と略記）と解離傾向との関連を調べる。加えて、形成されたイメージの内容の情動価を事後に分析することで、情動の効果を考察していく。

宮崎・菱谷（2001,2003）のモデルによると、イメージの類知覚的側面は、視覚的鮮明度、およびイメージ場面統御の2因子によって構成されている。嗅覚、触覚など視覚以外のモダリティの鮮明度は、最終モデルではイメージの情動的側面の下位因子となっているが、解離性障害患者のイメージには、視覚的な要素とともに、他の感覚モダリティの要素が含まれることも多い。そのため、本研究では、類知覚的現実感を構成する要因として、これら3つの要因を軸とし、さらに広く検討を行うため、イメージの体験の仕方についての要因も加えた。たとえば、イメージに没頭し、巻き込まれて振り回されてしまうといったイメージ体験の仕方は、イメージの現実感を高めることが示唆されている（神村・笠井, 2001）。解離傾向は、物事に没頭しやすい傾向との関連が示されていること

から (van IJzendoorn & Schuengel, 1996), この要因も、解離性障害のイメージ体験に重要な役割を果たしているのではないかと考えた。

なお、本研究においても、先行研究同様、非臨床群を調査対象とした。先述したように、先行研究において、非臨床群を臨床群のアナログとして見なすことには一定の妥当性が示されている。

方 法

調査対象者 調査対象者は、大学生、専門学校生 376 名 (男性 213 名, 女性 160 名, 不明 3 名) であった。未回答や回答に記入漏れがあった 44 名を除き, 332 名 (男性 184 名, 女性 148 名) のデータを分析対象とした。平均年齢は 20.0 歳 (SD=3.0 歳) であった。

質問紙

(1) イメージ質問紙

宮崎・菱谷 (2001, 2003) の研究において、類知覚的側面を構成していた 2 つの下位因子である「視覚的鮮明度」「イメージ場面統御」に属する項目、および、「聴覚」「嗅覚」や「触覚」, 「身体運動感覚」などの視覚以外の感覚モダリティに関する項目を抽出した。さらに、直接類知覚的現実感を測る「見えの現実味」、イメージへの「没頭」の程度を測る項目を抽出した。ただし、イメージ場面統御に含まれていた「自律性」の項目は、「自分の意思で統制できない」と「自由に展開する」ことの必ずしも相反しない 2 つの意味が含まれていると考えられたため、質問項目を「意図的制御」と「無意図性」の 2 つに分けた。また、独自に、視覚的鮮明度に関連する要因として「見えの安定性」を、「没頭」に関連する要因として「イメージへの関与」の項目を加えた。質問項目は計 15 項目となり、各項目は、名義尺度である「イメージへの関与」を除き、1～5 の 5 件法であった。

(2) 解離性体験尺度 (Dissociative Experiences Scale, DES : Bernstein & Putnam, 1986; 田辺・小川,

1992)

全 28 項目の自記式質問紙であり、各文に示された解離体験の頻度を、0% (全くない) から 100% (いつもそうだ) の 10% きざみの 11 件法で評定する。

全項目の平均点を解離傾向の高さの指標とした。

課題 Hishitani & Murakami (1992) を参考に、3 つのキーワードから一つの場面のイメージを形成するよう求めた。使用したキーワードは、菱谷 (1980) の研究において最もイメージしやすいと評定された「線路、夜店、小鳥」の組み合わせとした。現実物との類似性を最大化するため、形成する場面については、「現実には起こりそうな場面」になるよう教示した。

手続き 調査は集団で行った。調査対象者は、まず、「線路、夜店、小鳥」の 3 つのアイテムを含む一場面のイメージを形成するよう教示された。イメージを形成し終わった時点で、スライドに呈示されたストップウォッチの時間を記入し、イメージの内容をできるだけ詳しく記述するように求められた。その後、イメージについての各質問項目、DES の順で各々のペースで回答した。回答に要した時間は、平均 15 分程度であった。

結 果

調査対象者の DES 得点の平均値は 22.5 点 (SD=14.3) であり、重篤な解離の疾患が疑われるカットオフポイントとされる 30 点を越えた人は、91 名 (27.4%) であった。この値は、先行研究による大学生のデータと類似したものであった (田辺・小川, 1992)。なお、DES のカットオフポイントには 20 点から 30 点まで諸説あることから、以降の分析で群分けを行う際には、より確実な基準として 20 点未満を低解離群 (N=159)、30 点以上を高解離群 (N=91) とした。

イメージ質問紙の構造を調べるため、名義尺度である「イメージへの関与」を除いて因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。固有値やスクリープロットの情報より、3 因子の可能性が

示唆された。共通性が低かった項目「予想外の動き」を除いて分析を行った結果、以下の3つの因子が得られた(累積説明率45.8%)。第1因子は、「輪郭」「詳細」「安定性」「見えの現実味」「色」「没頭」からなり、これらはイメージの視覚的な側面を指していると考えられたため、「視覚的鮮明さ」と命名した。第2因子は、「触覚」「嗅覚」「身体運動感覚」「聴覚」の4項目から構成されていた。これらは、視覚以外の感覚モダリティの鮮明さを測定する項目であったため、「他感覚モダリティの鮮明さ」と命名した。第3因子は、「操作性」「応答性」「意図的統御」からなっていた。これらは、イメージの統御に関わる項目群と考えられたため、「統御性」と命名した。

次に、上記の3因子からなるイメージの類知覚的現実感が解離傾向の高さに影響を及ぼすというモデルを作成し、共分散構造分析を行った。その結果、適合度指標は概ね十分な値であり、パス係数は全て有意であった (Fig.1, $\chi^2(74)=149.32$, $p=.000$, CFI=.941, GFI=.941, AGFI=.916, RMSEA=.055)。

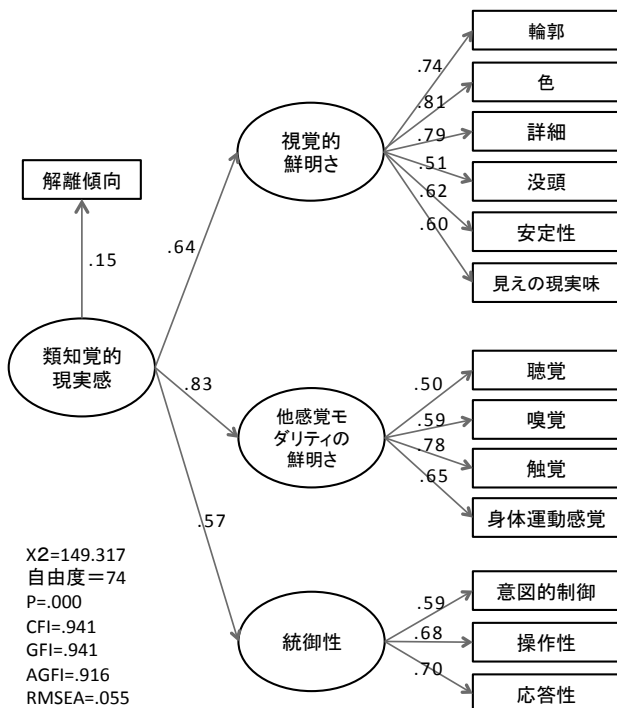


Fig. 1 解離傾向と類知覚的現実感との関連

イメージ内容の情動価については、以下の方法で

判定を行った。まず、IBM SPSS text analytics for surveys 4.0.1 の感性分析を使用して、各文にポジティブ (以下、P と略記) 文、ネガティブ (以下、N と略記) 文のタグをつけた。分類の確実性を高めるため、さらに、日本語評価極性辞書 (小林・乾・松本・立石・福島, 2005; 東山・乾・松本, 2008) を用いて、文中の語句についても情動価の判断を行い、再度、P 語が含まれている文には P 文、N 語が含まれている文には N 文のタグをつけた。

PN 両者のタグがつけられた文については、① 主な登場人物がいる場合は、その人物の情動価を優先する (ex.「周りは賑やかだが、主人公は孤独」), ② 時間経過がある場合は最終的な情動価を優先する (ex.「疲れていたが、癒された」), ③ 文中に含まれる PN 語のうち数が多い方を採用する、等の基準により、文全体の情動価を P か N のいずれかに判断した。PN いずれかの情動価を有すると判断された文章の数では、高解離群と低解離群に差は見られなかった ($\chi^2(1)=2.69$, $p=.10$)。

情動を含む文のうち、P 文と N 文の比率が高解離群と低解離群で異なるかどうかを確かめるため、解離傾向 (高・低) × 文の情動価 (P・N) の χ^2 検定を行った。その結果、P 文・N 文の比率には有意な偏りがあり ($\chi^2(1)=5.71$, $p=.017$)、低解離群では P 文の割合が高い (75.9%) のに対し、高解離群では相対的に N 文の割合が高いことが示された (43.6%, Fig.2)。

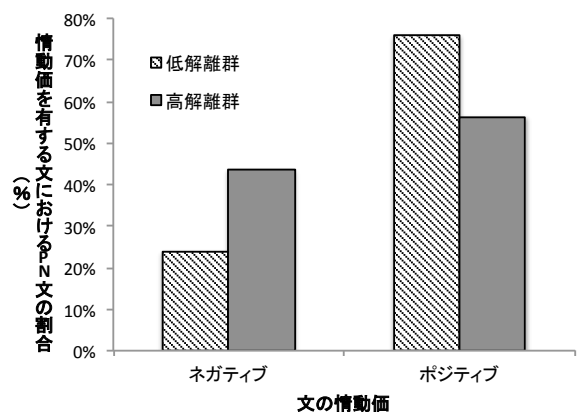


Fig. 2 解離傾向の高低とイメージ内容 (文) の情動価

なお、「イメージへの関与」については、高解離群と低解離群の間に有意な差はみられなかった ($\chi^2(4)=1.63, p=.80$)。

考 察

本研究では、イメージ能力を複数の構成要素からなる統合的なものとしてとらえ、まず、解離傾向と類知覚的現実感との関係について検討した。結果より、「視覚的鮮明さ」、「他感覚モダリティの鮮明さ」、「統御性」の3つの因子から構成される類知覚的現実感、解離傾向を部分的に説明することが示された。この結果は、解離傾向とイメージ能力との間に相関がみとめられなかった先行研究の結果とは異なるものであった。先行研究では、主にイメージの鮮明さのみ、あるいは、視覚モダリティのみを測定する尺度が用いられていたが、イメージの類知覚的側面に関する諸要因をより統合的に捉えたことで、臨床報告と一致する結果が得られたと考えられる。すなわち、解離傾向が高い人のイメージには、知覚的要素が多く含まれるために、あたかも現実のものであるかのように体験されるといえる。

また、解離傾向は、形成したイメージの情動価とも関連していることが示された。本研究では、イメージ形成のための題材として、「線路、夜店、小鳥」の3つのキーワードを用いた。形成されたイメージ内容を詳しく見ていくと、全体的には「夜店」からお祭りや居酒屋などポジティブな連想をする人が多かったのに対し、解離傾向が高い人の中には、小鳥が死骸となって現れたり、周囲が賑やかなのとは対照的に主人公が孤独を感じていたりなど、イメージに非常にネガティブな意味を付与した人が多く存在していた。その理由としては、解離傾向の高さは、抑うつ気分との相関が示されていることから (cf. Putnam, 1989 安・中井訳 2001)、抑うつ気分が、形成されるイメージに投影されていたのではないかと考えられる。イメージ

に伴う情動は、イメージ体験の現実感を高めるため (宮崎・菱谷, 2001, 2003)、解離性障害患者のイメージ体験は、類知覚的な要素が豊富に含まれていることに加え、ネガティブな情動も強く感じられ、より高い現実感を伴うものとなることが推測される。

高い現実感を伴うイメージを構成する能力は、解離性障害患者における様々な症状の基盤になっている可能性がある。たとえば、解離性障害の人には、幻覚を体験する人が多く、かつ、多くの感覚モダリティにわたって体験されることが示されている (Doraphy, Shannon, Seager, Corr, Stewart, Hanna, Mulholland, & Middleton, 2009)。こうした幻覚体験は、イメージが自らの意思とは無関係に生成された結果として生じている可能性がある。また、解離性同一性障害にみられる交代人格は、幼少期の想像上の友人が発展したものと考えられているが、解離性障害患者には幼少期の想像上の友人の保有率が高く、健常人のそれに比べて、実際に見たり聞こえたりするように感じられ、実在すると信じられている割合が高いことを示した研究がある (Sanders, 1992)。こうした体験の基盤にも、高い現実感を伴うイメージの関与が示唆される。解離性障害患者には、イメージをあたかも現実のもののように形成する能力が発症前から備わっており、そのイメージが何らかの要因によって制御不能となることによって、苦痛をもたらす症状となるのではないかと考えられる。

本研究の問題点として、イメージの「無意図性」は、イメージ質問紙の他の項目との共通性が低く、因子分析から除外せざるを得なかった。しかし、上述した幻覚や想像上の友人の体験には、イメージが本人の意図とは無関係に生じ、展開するという共通点がある。そのように、自らイメージを形成している感覚が少ない場合には、よりイメージの現実感が高まると推測される。こうした「無意図性」は、本研究でとりあげたイメージの類知覚的側面に関する要因とは独立して、解離性障害の

イメージ現実感に寄与している可能性は十分に考えられるため、この要因については、今後、詳しく調べる必要があると思われる。

引用文献

American Psychiatric Association. (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, fourth edition text revision*. Washington DC.

(米国精神医学会 高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 新訂版 精神疾患の分類と診断の手引 医学書院)

Bernstein, E.M., & Putnam, F.W. (1986). Development, Reliability, and Validity of a Dissociation Scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.

Doraphy, M.J., Shannon, C., Seager, L., Corr, M., Stewart, K., Hanna, D., Mulholland, C., & Middleton, W. (2009). Auditory hallucinations in dissociative identity disorder and schizophrenia with and without a childhood trauma history. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **197**, 892-898.

Heaps, C., & Nash, M. (1999). Individual differences in imagination inflation. *Psychonomic Bulletin & Review*, **6**, 313-318.

東山昌彦・乾健太郎・松本裕治 (2008). 述語の選択選好性に着目した名詞評価極性の獲得言語処理学会第 14 回年次大会論文集, 584-587.

Hishitani, S., & Murakami, S. (1992). What is vividness of imagery? Characteristics of vivid visual imagery. *Perceptual and Motor Skills*, **75**, 1291-1307.

菱谷晋介 (1980). 具体名詞の単一 I 価と統合 I 価九州大学教養部哲学「テオリア」(心理学篇), **23**, 97-117.

神村栄一・笠井仁 (2001). 情動とイメージ 菱谷晋介 (編) イメージの世界 イメージ研究

の最前線 ナカニシヤ出版 pp.115-137.

小林のぞみ・乾健太郎・松本裕治・立石健二・福島俊一 (2005). 意見抽出のための評価表現の収集 自然言語処理 **12**, 203-222.

宮崎拓弥・菱谷晋介 (2001). 主観的体験としての情動イメージの構造 Technical Report, 15. Sapporo: Hokkaido University, Department of Psychology.

宮崎拓弥・菱谷晋介 (2003). 正負情動価の違いがイメージ体験の構造的差異に及ぼす影響 Technical Report, 26. Sapporo: Hokkaido University, Department of Psychology.

Putnam, F.W. (1989). *Diagnosis and treatment of multiple personality disorder*. Guilford Press.

(パトナム, F.W. 安克昌・中井久夫 (訳)

(2001). 多重人格性障害 その診断と治療 岩崎学術出版社)

Sanders, B. (1992). The imaginary companion experience in multiple personality disorder. *Dissociation*, **5**, 159-162.

柴山雅俊 (2007). 解離性障害「うしろに誰がいる」の精神病理 ちくま書房

田辺肇・小川俊樹 (1992). 質問紙による解離性体験の測定—大学生を対象にした DES (Dissociative Experiences Scale) の検討 筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.

田中輝美・佐々木雄二 (1994). 恐怖イメージの鮮明さ 細分の意義について 行動療法研究, **20**, 10-19.

van IJzendoorn, M.H., & Schuengel, C. (1996). The measurement of dissociation in normal and clinical populations: meta-analytic validation of the dissociative experiences scale (DES). *Clinical Psychology Review*, **16**, 365-382.